

会議・視察報告

第2回モンゴル産業連関分析ワークショップ

ERINA調査研究部研究主任 Sh. エンクバヤル

2009年9月8日、第2回モンゴル産業連関分析ワークショップがウランバートルで開催された。これはERINAが継続して取り組んでいる産業連関表を使った経済分析のための能力開発支援の一環で、ERINAとモンゴル国家統計局（NSO）が共同で開催したものである。NSO、国家開発改革委員会、大蔵省、経営大学院、教育大学から約40名が参加した。

この分野で経験の豊富な専門家である国際大学国際関係学研究所長の秋田隆裕教授を招き、産業連関分析の基礎と産業連関表を使った関連する測定法についての講義が行われ、続いてコンピューターを使った実技が行われた。この講義で、秋田教授は、産業連関分析の基本的な目的は経済における産業の相互依存性を分析することにある点を強調し、部門間の直接・間接的な関係を共にとらえるレオンチェフ逆行列の本質について説明した。このような分析を使った調査例として、参加者に次の2つの調査報告書が配られた。1. 「地域間相互依存と地域の成長 - 地域間産業連関表による九州地域の成長要因分析」（秋田隆裕、片岡光彦、応用地域学会（ARSC）出版、2002年）。2. The Sources of Industrial Growth in Indonesia, 1985-95: An Input-Output Analysis (Akita, T. and Hermawan, A., ASEAN Economic Bulletin, December 2000)。講義とコンピューター実技の後、次の3つの発表が行われた。

筆者からは、GTAPデータベースにおける産業連関表の貢献について発表を行った。GTAP(国際貿易分析プロジェクト)は、国際的な政策課題に関する定量分析を行う研究者、政策立案者の国際的なネットワークで、経済全体の枠組みの中で世界経済問題に関する定量分析の質を高めることを目指している。GTAPは、アメリカのパデュー大学農業経済部にある国際貿易分析センターによって行われている。GTAPデータベースは全て文書化され、公開されてい

る世界的なデータベースで、毎年の世界経済におけるすべての2国間貿易の情報、輸送、防衛関連が含まれている。最新のGTAPデータベース第7版は、2004年を基準とした113の国・地域、57の統合品目から成る。地域のデータベースは各国の産業連関表から抽出されている。モンゴルは、まだGTAPデータベースの産業連関表にないが、今後、加わることになれば、国内外の研究者にとって、幅広い調査と定量分析を奨励することになるだろう。最近、NSOにおいてモンゴル産業連関表の作成が急速に進んでいることで、GTAPデータベースへの参加が早まる見通しが立っているが、ERINAとしてもこの流れを奨励したい。

NSOからは、2005年のモンゴル産業連関表作成について報告が行われた。モンゴルの産業連関表の作成は1966年から始まっているが、現在までに9つの表が作成され、最も新しいものは2005年版である。この表の作成は2段階で行われた。まず、127部門、285品目・サービスによる供給・使用表が作られ、次に、それが55部門、15統合部門の産業連関表に作り変えられた。統合表は一般に公表された。

最後に、経営大学院講師B.アリウントゥール氏から、産業連関分析を基にしたモンゴルの経済部門の構造的変化について発表が行われた。分析によれば、国の経済部門間の相互依存性とつながりは弱い。モンゴルの第1次産業部門は製品を未加工のまま輸出し、第2次産業部門は国内の原料の大半を加工することができない。併せて、第3次産業は主に輸入品を扱っている。また、最終需要は主に輸入である。そのため、B.アリウントゥール氏が述べるように、国の政策の多くは、しばしば、このような現実を適切に考慮することなく行われ、そのために望まない結果を生むことがある。

【英語原稿をERINAにて翻訳】